

2015年10月にNYでの国連総会に出席した安倍首相が、現地での記者会見で安保理常任理事国入りにも言及したとして国内で華々しく報道された。しかし、同時に、シリア難民受け入れについて海外プレスから質問を受け、難民と移民を混同したトンチンカンな回答をしたことをご記憶の方も多いただろう。

そもそも、国内の記者会見では質問する記者が予め決まっており、質問の内容も事前に書面で首相側に提出され、首相は用意された回答がプロンプターに表示されるのを読み上げるだけだという。NYでは海外メディアの記者にもその方式を強いたが、それに抵抗した記者たちが事前提出していない「普通の」質問を投げかけたそうで、シリア難民の質問はその一つであった。首相がそれにトンチンカンな返答をしたのち、また別の海外メディアの記者が辺野古基地の環境破壊に関する「普通の」質問を投げかけたところ、記者会見は予定された全質問をこなさないまま中止になったそうである。

この話を聞いて、筆者の頭の中にはすぐに学会発表や博士審査会が頭に浮かんだ。たとえば博士審査公聴会での質問が事前に書面提出され、学生がそれを検閲し、それ以外の質問は許されないという状況を考えてみるのは面白い。学生たちにとってはユートピアかもしれないが、その結果、どういう学生たちが輩出されるだろう？

「記者会見というのは市民を代表してジャーナリストが権力者に挑む場です。しかし日本の権力者の会見では質問内容を権力側が予め検閲し、その答弁は予め準備されており、会見はその通りに行われる。信じられません」「質問事項をあらかじめ提出しろということですから驚きました。そんなことは、アメリカでは記者倫理に違反する行為です。ところが、それは日本の政府と記者との間では常に行われていることだというではありませんか」とは海外記者の弁だそうであるが、アメリカではあのブッシュJr.大統領でさえ、記者会見で某国記者から靴を投げつけられた(!)際、とっさに「君の靴のサイズは・・・インチだね？」とおどけてみせたことが印象に残っている。

日本の言論の状況に関して、常日頃から教員の厳しい質問に四苦八苦している学生たちの感想を聞いてみたい。